

篠原 徹

## 自然を歩く ③

### 【憧れの狼】

野性という言葉がもつともふさわしい日本の動物は、絶滅してしまつたがニホンオオカミであらう。明治35（1905）年に奈良県吉野郡小川村鷺家口（わしかぐち）で最後のニホンオオカミが猟師によつて捕獲されて以来今年で110年になる。芭蕉の生きていたころの「姿の狼」の時代、蕪村の生きていたころの「声の狼」の時代、そして子規が声を聞き損なつて「狼に引きかぶりたる蒲団かな」と悔しがつた「心の狼」の時代を経て、今は「憧れの狼」の時代になつた。数年前、伊那谷の天龍村坂部を柳田国男記念伊那民俗学研究所の福田アジオ所長に誘われて一緒に訪れた。坂部の小社に祀られているのは山犬の頭骨だという。後にこの頭骨はニホンオオカミにまちがいないと同定されたそうだ。坂部ではかつて病気になるると修験者がやってきて山犬の頭骨を枕元に置き、平癒を願つて祈禱したそうだ。伊那の山は新緑で、「山滴る」直前であつた。天竜川を見下ろす坂部の山を疾駆する狼に思いを馳せた。